

教師という仕事  
－高校教師退職者の語りから－

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
辻 京子

この論文は、高校教師という仕事に焦点を当て、教師に対する支援のあり方を考察することを目的として書かれた。

今、多くの先行研究にあるように多忙化、バーンアウトなどが教師の現状として起こっている。また、教師は通常の授業に加え、生徒対応や勤務時間外の仕事、モンスターと言われるような保護者に対峙し、加えて学校間格差のある現状の中で仕事をしている。

そこで、本論文では、研究対象を高等学校とし、退職者に聞き取り調査をおこなった。調査内容の一点目は教職に就いた理由、二点目は続けてこられた理由や、やりがい、三点目では、高校教師は具体的にどのような困難な問題や障害にぶつかるのか。四点目はそのときに支援となったものは何か。最後に、五点目としてインタビューを受けた振り返りについて聞き取りした。調査方法はインタビューで、半構造化面接である。調査対象者は5名(男性2名、女性3名)で、いずれも高校教師退職者または定年前の方で、年齢は59歳から63歳である。インタビューは2013年9月から10月にかけて実施し、一人に要した時間は約1時間である。発話は録音し、逐語記録をこの研究の分析対象とした。

インタビューの結果、次のようなことが抽出された。一点目は5名の共通点として、教職に就くまでに教師という仕事に対する違和感や嫌悪感を持たず、教職に就いてからも「楽しい」「よかった」など、よい感情があることがわかった。二点目として、そのような気持ちを持って教職に就いている人は、困難な状況の中でも一生懸命行動し、乗り越えようとする姿が見られた。三点目は、それでも困難な問題にであったときには、支援してくれる誰かが傍にいてという点で共通していることがわかった。四点目として、教師が困難な状況に陥る原因の一つが生徒なのだが、その生徒との関係の中で大きな「喜び」を与えられていることもわかった。

この結果、教師を支えるものは何かと考えたとき、次のような点が重要だということがわかった。教師の仕事は人間と人間の関わりで、そこから生まれる喜びが教師を支えるということである。生徒との関係、教師との関係、保護者との関係のなかに教師を支え、育てるものがある。喜びだけではなく、困難な状況にあっても、そのことを教師自身が振り返り、自分自身で解決の道を模索することも重要なことである。また多くの教師が支援を求めるのは、一番理解してもらえる同僚であることから、管理職も含めた同僚間の支援ネットワークの形成を模索したい、という結論に至った。ネットワークの形成にはまだ、検討不足の点が多く、他職との比較をしながら検討することを今後の課題としたい。